

雨月

こじんまりした曲であるが決して侮れない。品位が高く、曲趣も豊か。前場では、老境の夫婦の、風雅ではあるがそこはかとなく寂しい暮らしぶりが漂っている。

シテは、前後ともに尉であるが、それぞれ性格が異なるので、前は穏やかに、後は厳かな感じを出し、静かな感じを出しながらも底力を込めて謡いたい。

最初のサシ謡から、静かに、落ちて着いて。剛吟から柔吟になるときは、ふっと力を抜いて思い切って低めにとるとよい。しかし、ハリ浮キや入回シは思い切って高いところまで持ち上げること。後シテは宮司であり、同時に住吉明神が憑依しているのだから、長丁場の謡は、気を抜かないで、じっくりと謡って頂きたい。この部分、イメージとしては、巻絹などのノットに近い。

ワキは西行であるから、当然ながら重いが、西行桜のワキとは異なり、独壇場がないから、シテの位、曲趣に準じて、控えめに謡うべきでしょう。

ツレも、連吟を含め、出番は多い方であるが、控えめに、シテの補佐役に徹すべし。

地謡は、独吟・仕舞の箇所が謡いにおいても、能においても、中心部分である。特にここは心して、謡って下さい。

盛久

実盛、通盛と並ぶ所謂「三盛」の一つで、難曲とされている。事実、四丁表のシテのサシ謡は千手のツレ、重衡の述懐を髣髴とさせる技巧に充ちた謡であるし、六丁裏の同じくシテのカカル謡も、クセの謡も簡単ではないが、それほどひねくれた謡ではないし、むしろ、後日、原作に付け加えられたとされている清水参拝(シテ)や、東下り(ロンギ)、更にはクセやキリのノリのよい男性的な気配のある謡などが随所にあつて、私はなかなか気に入っており、白謡会でも何回か出させて頂いている。だが、どうした訳か、一般的にはあまり会に出されないように思われる。準九番にしては稀曲に近く、難しい上に、観音利生という単純なテーマでかつ、筋立ても簡単で余韻に欠けるからなのか、理由はよく分かりません。(確かに能の舞台としては少々芝居がかつていて、幽玄の美を期待する向きには興味が薄い能であるかもしれませぬ)

ただ、ひとつだけはつきりしているのは、シテ、ワキ共に、底力のある人が謡わないとだらけた謡になってしまうことです。白謡会の女性陣にも、「この方」ならこの曲を謡っても様になるかなと思うこともあります。やはり男性に担当して頂いた方が無難かなとも考えます。

余談ですが、かねてから盛久の出自や戦争歴について知りたいと思っていました。この機会に、友人に依頼し、調べてもらいました。結果は以下の通りです。

「平氏にはいくつかの家系の流れがあり、重衡は季衡系の平国香(伊勢平氏の祖)の三代後裔にあたります。平資盛が鈴鹿に配流されたとき父の命令で侍従しています。

平氏の侍大将で壇ノ浦の戦いのあと、都に潜伏していたが妻を見逃してくれた恩に報いるため、堀弥太郎近経に須磨の浦で捕われて鎌倉に送られ、由比ヶ浜で処刑されています。平家の菩提を弔うため観世音信仰が深かったらしく、処刑直前に助かったストーリーはそこから出たかも知れません」

西行桜

およそ四十年前のことです。NHKラジオでこの曲の放送をしました。それまでにこの曲の師伝を受けていた私は、シテ、ワキ共に、それ迄習ったどの曲よりもゆったりと謡うことに関心を持ち、放送時に時間を計測してみました。結果、いずれも出だしのサシ謡ですが、ワキ（浅見重弘）は五行ちよつとのところを二分五十五秒で、シテ（武田多加志）は四行弱を二分十秒で謡っていました。

シテは桜の老木であり且つ花の精でもあり、これが歌詠みの西行と対峙する訳ですから、いやが上にも幽玄の情緒を盛り上げなくてはなりません。芯は力強く、しかし荒ぶれることなく、しめやかに、素朴に謡って欲しいと思います。西行の夢のなかに現われたとも受け取れる桜の精は夜明けとともに去っていかねばならぬことを嘆きます。クセで桜の名所尽くしを謡い上げたあとだけに一層無常観が強く漂います。

ワキはシテが出てくるまでにかなり長い時間主役を務めます。こと素謡に関しては、両シテともいふべき役柄がワキに与えられています。そして通常のワキの役割を務めるのがワキツレです。

地謡も気が抜けません。先ずは、曲趣を理解することが良い謡を謡うことにつながるのではないのでしょうか。

ついでに、「群れつつひとの・・・」の歌の咏吟が三回繰り返されますが、これが謡いとして神経の使うところです。最初はワキの謡ですから自ら作った歌を詠みあげる、二度目はシテがこれを洩れ聞いて、独りごとのように反芻する。三度目はシテがワキに向ってあなたはこのように歌を詠んだけど・・・とクレームをつける場面であることを念頭に置いてお謡い下さい。

葵上

嫉妬に狂う女性を主人公とした執心物と簡単に片付けてはいけません。少なくとも「鉄輪」とは大違いです。シテは皇太子妃、現代流に言えば妃殿下ですから、自分よりも位階の低い若い女に対して嫉妬に狂うこと自体が恥ずかしく、はしたないことだと思っっています。それにも拘らず、心の中での、もやもやが募って、相手を取り殺してしまいたいという想いが生霊となって出現するという、女のさかの苦しき、悲しさがテーマではないでしょうか。だから、後妻打ちをしたあと、「恥ずかしや・・・」と言って顔を隠しながら去って行きます。（余談ですが、クドキの中で「我世にありし古は・・・」とは、かつて夫に添い寝していた頃は、の意味であり、「朝顔の日影待つ間の・・・」の意は、独り寝のこと。もう一つ余談ですが、男の嫉妬の方が底深く、恐ろしいように思えるのです。が、「恨めしや・・・」と出てくる幽霊は女性ばかりなのは何故でしょうか）

ですから、シテの謡は凄味が一番先に出てはいけません。後シテにおいてさえ、品位を欠くような謡はいけません。まして、前シテは一貫して自己撞着に悩みながらの嫉妬心の発露ですから、哀しさや、ためらいがあることを意識しながらの謡いであってほしいものです。

ワキは横川の小聖。陰陽師ですから、能では装束からして立派です。でも、上述の曲趣を踏まえて、あまり嵩にかからず、威厳を保ちながらも、落着いて謡って頂きたいのです。

また、霊媒のツレも冷静に、どちらかという淡々と。シテとの掛け合いもありますが、カカリ過ぎて、シテを挑発しないようにして下さい。

ワキツレは大臣という位を意識して謡って見たらよいのではないのでしょうか。

地謡、就中、柔吟の地謡は「善知鳥」や「女郎花」の地謡に通ずるところがあります。これは、自己撞着に悩みながら激しい嫉妬心に自ら苦しんでいる、内向的な激しさを表現しているのではないかと解釈しています。

隅田川

一言で言えば、能のなかでのベスト・ドラマと言ってよいでしょう。これほど突き放したような無常観は隅田川を描いてほかにありません。現在物だからでもありません。典型的な能にみられる、ある意味では上品な、そこはかとない無常観の表現と異なり、持つて回らない、とても生々しい展開ですし、また、写実的な要素も多く、シェークスピアの戯曲のようです。

このことを認識したうえで、さて、どのように謡うかですが、私は、曲趣に素直に従って生々しく謡うべきだと考えています。役処も地謡も取り澄ますことなく、感情に任せて率直に歌い上げることが要諦ではないかと思えます。

シテについて言えば、「百万」同様、最初から狂女ですから、誰はばかることなく奔放に謡って下さい。

ワキは小舟の船頭だからといって軽んじてはなりません。極めて重く、威厳があります。おそらく、当時は国境線でもある川の交通を司る船頭には、警察権のようなものも与えられていたことでしょう。

一番の謡いどころ、聞かせどころは言うまでもなく「語」です。2枚強におよぶ長丁場ですから、聞き手が退屈してしまつては、全曲がぶち壊しになります。能としての節度を維持しつつ、高低、強弱、緩急の三次元方程式を解きながらの、全神経を集中しての語りでなければなりません。

子方はわずか二くさりの出番ですが、これがまた大変な役です。声量のある人でないと務まりません。地謡との合吟の部分は、通常の合吟と異なり、地謡に音階もテンポも合わせることなく、付かず離れず、勝手に、しかし可愛く、明らかに地謡とは別人が謡っているように聞こえなくてはなりません。(最近の例では、川崎の会で菅原さんがなかなか良い味を出していました)

ワキツレは、明るく、爽やかに、淀みなく謡うのが良いでしょう。

蛇足ながら、所要時間が長いことに加えて、難易度が極めて高く、シテ、ワキともに人を得ないといけないとか、特に、地謡の念仏のところ揃いに、白謡会(大会)では30年ほど前に一度出ただけです。研究会では、省略なしで全曲謡い切りを基本としていますので、今後も長くて、難しい曲を折にふれて上演していきたいと考えています。

もう一つ余談ですが、隅田川のクライマックスは、シテの「のお、舟人・・・」以下のシテとワキの問答の部分ですが、本曲同様に、世阿弥の長男の元雅の作とされている「歌占」にも似たような詞章があります。しかし、本曲のシテの心情はこの問答で急転直下暗転するのに対して、歌占では明るくなっていくという対照的な違いがあり、従って詞章は同様であっても謡い方が全く異なります。